



昭和30年代に撮影されたと思われる空撮写真。このときへりを探縦していたのが先代の幸次郎の兄。一方、幸次郎はこの撮影に合わせて「せっかくだから」と屋根にのぼって、ペンキで豪快に屋号と店名を書いた。

消えた老舗の看板
まさかの再開

一度店をたたんだ老舗に対し、いくら市民が再開を熱望したところで、その思いが叶うことはまずない。ただ、ごく稀に例外がある。その稀有な一例こそが、1945（昭和20）年創業の中島廉売内「太田かまぼこ」だ。今から13年前、後継者不在を理由に一度は閉店。しかし5年後の2012（平成24）年、まさかの再開に踏み切り、ファンを大いに喜ばせた。決断したのは創業者・太田幸次郎の孫の太田寛人さん。現在40歳の寛人さんは当時32歳。自身で立ち上げた道産食材のネット通販会社の運営をしていた。

「店を倉庫として使っていたので、建物には毎日出入りしてたんです。夏場とかは暑いのでシャツターを開けて作業していると、かつて常連だったお客さんが勘違いして『お、また始めん



の？」ってニコニコしながら次々入ってくるんです（笑）。それに加えて、取引先とか同業者の方々から「またやらないの？」創業者の太田幸次郎。店を構えたのは終戦直後。当時、幸次郎が中島廉売に客を呼び寄せるために主催したのが豚のレースもちらん賭け事として、「当然警察にしょっぴかれて大変な目に遭ったらしいですけどね（笑）。常に破天荒な人だったけど、嫌われないし、なぜか慕われる人でした（寛人さん）。



わした些細な会話から新しいヒット商品が誕生した。ある日の夕方、店にやってきたのは先代の時代から通い続ける90歳の女性客。「そのおばあちゃんが『わたしは20歳そこそこの頃、ここにはいかを練りこんだかまぼこが必ずあって、店でばったり会った顔見知りだと立ち話をしながら店の前でよく食べた』という話をしてくれました。続けて『今ならそれにパン粉つけてコロッてみたいにして売った

ら若い子が喜んでないの？』と言った。それがヒントになって早速試作して、その年に出店したグルメイベントで『函館いかメンチ』として販売したら、いきなりドカンと売れたんです。それ以来、うちの看板商品になりました。

再開して1年後の2013（平成25）年、店頭での客と交

商店街や市場、廉売から市民の足が遠のいて久しい。おそろく今後もそこで商売をする店への逆風は吹き続ける。それでも太田かまぼこでは、大手ポイン

と言われ続けました。このときに先代の努力の結晶じゃないですけど、本物の力みたいなものを感じたんです。何年も経つのに、忘れられることなくそう言ってもらえるのはすごいことだなあと。そういったまわりの方々からのありがたい言葉の蓄積があって、徐々に再開の方向に気持ちが傾いていきましたね」

先代はかまぼこ作りのレシピを残さずして逝ってしまった。寛人さんは学生時代に先代の仕事を手伝った経験と舌の記憶を頼

トカードのポイント還元やキャッシュレス決済も導入。ネットでの情報発信は主にインスタグラムと、昔ながらの対面商売と並行して現在進行形の商売も実践している。そして昔と変わらずそこにあるのは、店と客との他愛もないやりとりだ。「昔の商売人はたぶんこういう『目に見えないこと』を大事にしてきたはずなんです。それはイコール『売った・買った・ハイおしまい』では終わらないことじゃないかなと思います」取材の終わり際、高齢の女性客がふらりと店に入ってきた。すると店員が客に向けた第一声は「いらっしやい。病院の帰りかい？調子どうなの？」。



代表の太田寛人さん。「例えば札幌の大きな物産イベントに出店すると、お客さんから『あの中島廉売の太田さんですか？』とか『場所はまああそこなの？』とよく聞かれます。多くの人たちにとって、やっぱりここは“中島廉売の”店なんです。今後、もっと商売に適した場所に移転するなんてことは、まずお客さんが許してくれないと思います（笑）。



長年の常連客との会話で生まれた看板品「函館いかメンチ」。物産展などイベント出店の際は不動の人気を誇る。



【太田かまぼこ】
函館市中島町28-13 0138-54-5477

特集

店とお客の
いい関係。